

# 人外魔境

水棲人

小栗虫太郎

青空文庫



## リオの軽口師

折竹孫七が、ブラジル焼しょうちゆう酎ちゆうの『Pinga』《ピングガ》ピソカというのを引っさげて、私の家へ現われたのが大晦日の午後。さては今日こそいよいよ折竹め秘蔵のものを出すな。このブラジル焼酎ピングガを飲やりながらアマゾン奥地の、「神リオ・フォルス・デ・デイオスにして狂う」河の話をきつとやるだろう……と私は、しめしめとばかりに舌なめずりをしながら、彼の開口を待ったのである。

ところが、その予想ががらつと外れ、意外や、題を聴けば「水棲人」。私も、ちよつと暫しばらくは聴きちがいではないかと思つたほ

どだ。

「君、そのスイセイとは、水に棲むすという意味かね」

「そうとも」と彼は平然と頷くうなず。しかし、人類にして水棲の種族とは、いかになんでもあまりに与太すぎる。こつちが真面目なだけに腹もたってくる。

「おいおい、冗談もいい加減にしろ」と、私もしまいにはたまらなくなつて、言つた。「人間が、蛙やおつとせ臙肭獣おつとせじゃあるまいし、水に棲めるかつてんだ。サアサア、早いところ本物をだしてくれ」

すると、折竹はそれに答えるかわりに、包みをあけて外国雑誌のようなものを取りだした。  
レヴィストラ・ジエオグラフィカ・アメリカナ  
*Revista Geografica Americana* —

—アルゼンチン地理学協会の雑誌だ。それを折竹がパラパラとめ

くつて、太い腕とともにグイと突きだしたページには、なんと、

インコラ・パルストリス

“*Incola palustris*” 沼底棲息人と明白にあるのだ。私は、折竹

の爆笑を夢の間のように聴きながら、しばしは茫然たる思い。

「ハハハハハ、魔境やさんが、驚いてちや話にもならんじやないか。どれ、この坊やおろして、本式に話すかね」

折竹の膝には、私の子の三つになるのが目を<sup>みは</sup>瞠っている。ター

ザンのオジサンという子供の人気もの——折竹にはそういう反面もある。童顔で、いまの日本人には誰にもないような、<sup>ぼうこ</sup>茫乎とし

た大味なところがある。それに加えて、細心の思慮、縦横の才を蔵すればこそ、かの世界の魔境未踏地全踏破という、偉業の完成もできたわけだ。その第五話の「水棲人」とは？……折竹がやお

ら話しはじめる。

「ところで、これは僕に偶然触れてきたことなんだ。『神リオ・フオルに

して狂ス・デ・デイオスう』河攻撃の計画の疎漏そろうを、僕が指摘したので一年

間延びた。そのあいだ、ぶらぶらリオ・デ・ジャネイロで遊んで

いるうちに、偶然『水インコラ・パルストリス棲人』に招きよせられるような、

運命に捲まきこまれることになった。

えっ、その水棲人とはどこにいるって　まあまあ、急せかせず

にブラジル焼酎ピンガでも飲んでだね、リオの秋の四月から聴きたまえ」

\*

リオの、ヴェント・モデラード軟微風とはブラジル人の自慢——。

棕櫚花しゆろのにおいと、入江の柔かな鹹風しおかせとがまじった、リオの

秋をふく薫風の快よさ。で今、東海岸散步道パイラマールの浮力フェーうきからぶ

らりと出た折竹が、折からの椰子やしの葉ずれを聴かせるその夕暮の

風を浴びながら、雑踏のなかを丘通りのほうへ歩いてゆく。その

通りには、「恋ポムピニョス・エナモール鳩マツトオ・ヴィルジエン」  
「処女林」と、一等

船客級をねらうナイトクラブがある。

「ううい、マツトオ・ヴィルジエン処女林か。処女林なんてえ名は、どこにも

あると見える」

と彼は、蹣跚まんさんというほどではないが相当の酔心地よいこち、ふらふ

ら「恋鳩」の裏手口を過ぎようとした時に……。いきなり内部か

ら風をきつて、彼の前へずしりと投げだされたものがある。みると、一つのスーツケース。とたんに奥で、癩かんだかい男のどなり声がする。

「さあさあ、出てけ出てけ。君みたいな芸なし猿トローロに稼がれてちや、沽券こけんに係わるよ。さあ、ヴァツ・セ・エンボーラ出ろ！」

皆さんは、よくこうした場面シーンを映画でご覧になる。お払い箱と  
いうときは襟えりくび首をつままれて、腰骨を蹴られてポンと抛ほうりだされるが、これも举措動作きよそがひじょうな誇張のもとに行われる、南米のラテン型の一つ。おやおや、ここの芸人が一人お払い箱になるらしい。どんな奴だ、さだめし肩をすぼめて悄しよんぼりと出てくるだろうと——多少酔いも手伝った折竹が、そのスーツケースを



手にもつて、いま現われるかと入口を見守っていたのだ。

まったく、こうして佇たたずんだ数秒間さえなければ、かの怪奇の点

では奥アマゾンしのを凌ぐといわれる、  
インコラ・パルストリス  
 水 棲 人 のすむあの

秘境へはゆかなかつたらうに。  
エステロス・デ・パチニヨ  
 Esteros de Patino ——すなわち

「パチニヨの荒湿地」といわれる魔所。

まもなく、その入口をいっばいに塞ふさいいでしまいそうな、大男が

悠然と現われた。舗道へ降りると、ちよつと足もとのあたりを一、

二度見廻していたが、すぐ折竹に気がついたらしく、

「やあ カピトーン 将、拾つといってくれたね」

「番をしてたよ。どうせ、出てけ——を喰わされるようじゃ、だ

いじな財産もんだろう。さあ、たしかにお渡ししたよ」

しかし、此奴こいつがと思うとじつに意外な気持。猫のように摘みだされた失業芸人とは、およそ想像もされぬ態の人物。肩付きたくまの逞たくましさは門かぬきのよう、十分弾力を秘めたらしいひき締てあしつた手てあし肢、身長、肉付き、均きんせい齊せいといひ理想的ヘルメス型の、この男には男惚れさえしよう。

それに、服装なりをみればおそろしい古物——どこにもクラブ稼かせぎの芸人といったようなところはなひ。違ちがつたか、渡してしまつたしとんだことをしたと、折竹も氣になつてきて、

「だが、たしかに君のだね」

「ハツハツハツハ、大将は聴いてたんだらうが」

とその男はカラカラと笑うのだ。

「あの、俺に出てけ出てけといった、キイキイ声の奴な、あれが、ここの支配人でオリヴェイラつてんだ。俺は、あのチビ公に腰を折ってだね、どうか御支配人、ながい目で頼む。きつと、今夜から大受けにしてみせると、言ったんだが聴いちゃくれない。もつとも、理屈は向うにあるだろうがね」

陽気で、早口で、どこをみても、お払い箱早々というような、行き暮れたところがない。顔も、駄々つ子駄々つ子してダグラスそっくり。声まで彼に似て、豪快に響いてくる。

「俺は、女形おやまをやれる軽口師ガルガンタという触れこみで、つい四日ほどまえ『恋鳩』に雇われた。初舞台——。ご婦人の下着などを取りだして、すっきりと笑わせる。と、行ってくれりや何のこたあな

かったよ」

「引つ込め——か」

「いわれたよ。しかし、ものというのは、とりようだと思ふ。俺がずぶの素人でいてやかまし屋の『恋鳩』の舞台を、よく三晩も保つたかと思えば、われながら感心するよ」

「驚いた」と折竹も呆れかえつて、

「君は、ガルガーンタ軽口師のガの字も知らんのじゃないか」

「そうとも、窮すればなんでもするよ。浪人数十回となれば、女中にもなれる」

そう言つて、とつぷり暮れた夜気を一、二回吸い、しばら暫く、空の星をつくねんとながめていたが、急に、なにかに気付いたらしく、

くるつと振りむいた。彼は、ぜひ大将に話したいことがある。それには、ここじや何だから彼方あっちでといつて、ぐいぐい折竹を急ぎ立てて、向うの小路へ入つていった。

「なんだね」

「じつは、大将にこれを見て貰いたい」とポケットからだしたその男の掌には、キラキラ光る粒が二、三粒転がっている。手にとると、まだ磨かれていないダイヤの原石。大きさは、まあ十カラットから二十カラットぐらいだろうが……、それよりも、掘りだしたままの土の手触りが、折竹にはじつに異様であつた。彼は、手にとつた石をあつさりと返して、

「君、これは盗とつたやつかね。それとも脱コントラバンド税品か」

「マア、言<sup>い</sup>や後のほうだろう。ところで、見受けたところ大将は、  
日<sup>ジャポネーズ</sup>本人らしい。日本人でも、サントスやサン・パウロにいるな  
らお移<sup>コロノ</sup>民さんだが、リオにおいでのようにや大使館だね。まった  
く、どこの税関でもお関<sup>かま</sup>いなしに通れる、結構なご身分というも  
んさ。こつちも、そういう御<sup>ご</sup>仁<sup>じん</sup>相手<sup>あて</sup>でなけりや話しても無駄だし、  
また、大将なら乗<sup>のり</sup>つてくれるだろう。どうだ、いい値で売<sup>う</sup>るが、  
いくらに付<sup>つ</sup>ける」

しかしその時、折竹は一つの石をじつと見詰め、じつにブラジ  
ル産<sup>ま</sup>にしては稀<sup>まれ</sup>ともいいたい、その石の青色に気を奪<sup>う</sup>われていた。  
小石ならともかくこうした大型<sup>ボ</sup>良品<sup>ン</sup>にあつて、美麗<sup>る</sup>な瑠璃<sup>り</sup>色<sup>いろ</sup>を呈  
すとは、じつに珍しい。ブラジル産にはけつしてないことである。

「君、これはブラジルのじやないね。南阿アフリカかね、英領ギニアかね」

「どうして、泥のついた掘りたてのホヤホヤだ。といつて、ブラジルでもなしオランダ蘭領ギアナでもない。こいつは、おなじ南米でも新し礦地んこうちのもんだ」

出様によつては、なにかそれに就ついて言い出したかもしれないが、あいにく折竹はダイヤなどというものに、熱や興味をいさぐような、そんな性格ではない。その男も、折竹の態度にアツサリとあきらめて、もとのポケットへポンと突つこんでしまったのだ。

「これはね、じつは俺には宝のもち腐れなんだ。この国は、脱税品がじつにやかましい。うっかり持っていようものなら、捕まっ

てしまふんだよ」と、いよいよよさようならというようにニツコリ笑い、一、二歩ゆきかけたが、立ちどまって空を仰いだ。おおらかに、胸をはり嘯くうそぶように言う。

「はてさて、俺も追ん出されて行き暮れにけり——か。颯さつ爽そうと、乞食もよし、牧童ガウチヨもよし」

男の魅力が、時として女以上のものである場合がある。ここでも、これなりこの奇男子と別れたくないような気持が、折竹にだんだん強くなつてきた。

警拔きよそなる举措、愛すべき図々しき。なんという、スツキリとした厭味のないやつだろう。しかし、この男が何者かということとは、ほぼ彼に想像がついていたのだ。泥坊か、密輸入者か故買けいずかい者か。



どうせ、素姓のしれぬダイヤなどを持つようではそんな類いだらうが、とにかく、なんにもせよ氣に入った奴だと、一度打ち込めば飲ませたくなるのが、折竹のような生酔いの常。

「どうだ、一杯やるが付き合うかね」

「酒」と、その男は飛びあがるような表情。「せめて、飯とも思っていたのに、酒とは有難い。有難い。大将、このとおりだ」

それから、リオ・ブランコ街の一料亭へいったのが始まり、それが、インコラ・パルストリス水棲人オブリガードに招かれる奇縁の因となるのである。

## 一番違い

その男は、カムポスというパラグアイ人。詳しくは、カムポス・フイゲレード・モンテシノスという名だ。首府アスンシヨンの大学をでてから牧童がはじまりで、鬪牛士、パラグアイ軍の将校と、やったことを数えれば、とにかく、五行や六行は造作なくとろうという人物。それが、ぐいぐいあお呷りながら、虹のようなきえん気焰をあげはじめる。

「人間は、ちいさなチャンス機会などに目をくれていたら、大きなのを失うよ。誰にも、一生に一度はやってくる大でっかいやつを、俺は捕まえようってんだ。これはね、女にだって同じことだろうと思うよ。男が、生涯に惚ほれる女はたった一人しかない。ドン・ファンや、カザノヴァが女をあさ漁ったね。だがあれは、ひとりの永遠の女

性を見付けるためだったと——俺はマアそういうふう<sup>に</sup>解釈している。つまり、俺のは最上主義なんだ」

「それが、君の放浪哲学だね。些細な、富貴、幸福、何するものぞという……」

「そうだ。時に、喋<sup>しゃべ</sup>っているうちに気が付いたがね、今夜は、

『Bicho 《ブツシヨ》』の発表の晩じゃないか」

『Bicho 《ブツシヨ》』というのは、ブラジル特有の動物富<sup>とみく</sup>

籤<sup>じ</sup>である。蟻<sup>タマンツア</sup>喰いの何番、<sup>ホルコ・デ・マツトオ</sup>山豚の何番というよう

に、いろんな動物に分けて番号がつけられている。その、当り籤が今宵の十二時に、ラジオを通じていつせいに発表されるのだ。

それから二人は、パゲタ島からおう花風のなかで、動物富籤<sup>ビツシヨ</sup>の

発表を待ちながら酒杯を重ねていった。折竹は、もう泥のように酔ってしまっている。

「ううい、動物富籤ビツシヨを一枚、てめえ大切候だいじそうに持ってやがって……。おいカムポス、俺はなんだか、可笑しくって仕様がねえ」

「ハツハツハツハツハ、なけなしの俺が一枚看板みたいに、動物富籤をもっているのが、そんなに可笑しいか。だが、俺だつて当ると思つちやいないよ。易うらないだ。未来を卜ぼくすには、これに限るよ」

やがて、十二時が近付くにつれ、しいんとなつてくる。おそらく、動物富籤をもたぬものは一人もあるまいと思われるほど、この富籤には驚くべき普遍性がある。やがて、ラジオから当り番号が流れはじめた。そのうち、最高位の五万ミルの当り籤が、カム

ポスの持っているガラガラカスカヴェル蛇カス札カスのなかにあるという、声に続いて番号の発表。五九六二一番。——とたんに、カムポスが、ううと呻うめいたのである。

「どうした、カムポス、当たったのかい」

「一番ちがい、大将、これを見てくださいよ」

みると、カムポスの札はたった一番ちがいで、五九六二〇番だ。たった一番——。むしろ酒よりもじぶんの運命に酔ったよう、黙って、カムポスはじつと卓を見つめている。折竹は、もうその時は昏こんこん々とねむっていたのだ。

そんな訳で、翌日目を醒さましたのは日暮れ近くであつた。みると、寝台のそばにカムポスがいて、じつに器用な手付きでズボン

を繕つくろっている。こいつ、昨夜のあのカムポスじゃないか。してみると、じぶんはカムポスに背負われてきたのだろう。そうそう、昨日の籤は一番違いだったつけがと……じつと目をつぶるとゆうべの記憶が、まぶた瞼の裏へ走馬燈のように走りはじめる。そこへ、カムポスがにこつと笑つて、

「兄アミーゴ弟、目が醒めたかね」

きようは、昨夜は大将だったのが、兄アミーゴ弟にアミーゴ変っている。そして針を手馴れた手付きで、スイスイと抜きながら、「どうだい、世帯持ちのいい、女房を持ちやこんなもんだよ。これからは、みんなこんな工合に、俺が繕つくろつてやる」

「上うま手いもんだね」

「そうとも、お針だつて料理だつて、出来ないものはないよ。俺は、コルセツトの紐鉤ちゆうこうに新案さえもっている」

この、奇抜な男が泥坊にもせよ、折竹はけつして厭がらなかつたろう。いまは、意気投合というか絶妙な気合いで、二人の仲が完全に結ばれてしまったのである。たぶんカムポスは当分の食客を、折竹のいるこの室ですることになるだろう。とその夜、二日酔退治にまた酒となつた席上。

「じつは、大将に聴いてもらいたい話がある」と、なにやらカムポスが真劍顔まがおもに切りだした。

「それはな、ゆうべの動物富籤ビツシヨの一番違いのやつさ。あれから、俺はとつくりと考えてみた。するとだよ。あの当り籤はガラガラ

カスカヴェル

蛇 札の、五九六二一番、俺の札が、一番少なくて六二〇番。

と、そのもう一番で上りという意味から考えて……なんだか俺は  
いま途方もないような、生涯に一度ともいう大運に近付いている  
んじゃないか——とマアそんな風に考えられてきたのだ」

「担ぐ<sup>かつ</sup>じゃないか」と折竹は面白そうに笑って、「だが、俺の国  
の判じようだと反対になるがね」

「なんでだ」

「つまり、俺の国でいう一番違いという意味は、運の、じき側ま  
でゆくがどうしても追い付けない、その、たった一番だけの距離  
をどうしても詰められない、とうとう、追っ付けずに一生を終っ  
てしまうという、ごくごく悪い意味になるよ」



「チエツ、縁起でもねえ」と、舌打ちはしたが自信は崩れぬばかりか、カムポスが大変なことを言い出したのだ。

「とにかく、俺は俺の考えをあくまでも押し通す。そういう気力には、逃げようとする運までも、寄つてくるといふもんだ。で、大将にたいへんなお願いだがね、俺は、ここでいちばん運試しをしようと思う。一番先にある運をつかまえてやろうと思うんだ」

「それには——」

「大将に金を借りる。それで、俺は今夜、賭博場キヤジノへゆく」

折竹は、しばらくカムポスの顔をじつと見まもっていた。鉄面皮といふか厚かましいといふか、しかし、こういうことを些いさかの悪わる怯びれさもなく、堂々と、些いさ細の洩はろいもなく言いだす奴も珍し

い。気に入った。こりや、事によつたらカムポスに運がくる。これ、この泥坊が足を洗えりや、俺は一つの陰徳をしたというもんだ。

なにしろ、独り身で金の使いようもないうえに、週給五百ドルをもらう折竹のことであるから、たかが、千ドルや二千ドルなら歯<sup>し</sup>が<sup>が</sup>に<sup>が</sup>けるにも当らない。よろしいと、彼はカムポスの申出でを、きつぱりと引きうけてやった。

リオでは、ポムビニヨス・エナモール恋鳩「キヤヅノの賭博場が最大である。折竹

は、そこへ兼ねて紹介されていたが、ここで、困ったのがカムポスの処置。なにしろ、軽口師でございと大嘘をいって、あげくの果に追いだされた彼のこと。しかし、カムポスはご心配なくと、

自信あるのかしやあしやあ洒々たるものだ。まず、鼻下の細髭ひげを剃り落し  
もみあげを長くして、これなら、三日ガルガンタ軽口師ナリシスの「鼻のカムポス」  
とは、誰がみようと分るまいというのである。そうして、その翌  
夜「恋鳩」へいった。

歓楽地、リオへ遊ぶ一等船客級相手のナイトクラブ——。財布  
の底まで絞りにしぼって、オケラになつたらまたお出でというの  
が、此処だ。したがって、リオの歓楽中いちばん暗黒のものが、  
キャジノ賭博場をはじめ洩れなく揃そろえられている。

「君、ヴォツセ・ケル・アポスタール一丁賭くか」そんな声が、はやとつ突きの玉転ポ  
がし場イチヤからも響いてくる。婦人の、キラキラかがやくまっ白な胸、  
脂粉、歌声、ルーレットの金搔ロドき棒の音。二人が、内部のキャバ

レーへはいると、パツと電気が消える。

エステ・エ・ブランコ  
これは白い  
ペルレ・エ・ブランコ  
白いは肌

と、舞台の歌声とともに 緞帳どんちようがあがるが、だんだん、その白いというのが肢だけでなくなくなるといのが、「恋鳩」のナイトクラブたるところだ。それから、キャバレーを出てちよつと口を湿しているうちに、ふいにカムポスがなにを見たのか、ボーイを呼びとめてあれと顎あごをしゃくつて見せた。

「君、あのご婦人はなんて方だね」

ボーイは、ちよつとその方向をみるや、にこりと笑つて、

「さすが、旦那さまはお目が高ういらつしやる。あの、ちよつと小柄な金髪ブロンドでございましょう。お計らいなら手前致しますが、

なんせい、美しいだけに、ちよつと高価うございますよ」

すると、カムポスはそれを遮つて、違うと叱るように言った。

「あれじゃない。ホラ、あの右にいる黒いドレスの方だ。あれは、まさかここの妓こじゃあるまい」

「ほう、あの方」とチップを貰ったボーイが、にこつとなつて言った。「あの方は、グローリア・ホテルにご滞在中とかでございます。ここでは、たまにルーレットをおやりになるくらいのもんで、マアこんなところへ何でお出でになつているのかと、手前どもも不審に存じあげておりますんです」

その婦人は、もう娘という年ごろではないかもしれぬ。面長

で、まさに白百合とでもいいたい上品な感じは、まったく周囲が

周囲だけに際だって目立つのである。カムポスは、妙に熱をもつたような瞳でじつとその婦人を見ていたが、まもなく、運定めをする賭け場へはいつていった。

魔境「トッコ・ダ・フェート蕨の切り株」

そこは、人間の運がいろいろに廻転し、ヴォツセ・ケル・マタ・ピツシヨおい、奢るぞ

——と勢いよく出てくるのもあれば、ホージ・エ・アザール曲つてる！ なんて

三リンボウが続キアがるんだと、いずれは、ピストルのご厄介らしくうちしお悄れてしまうものもある。しかし、カムポスは気込んだかい甲斐もなく、みごと「バランス平均」という賭け札でスツテンテンにな

つてしまった。

それみろ、やっぱり一番違いの解釈はおれのほうが正しい——と、じつと、その意味をこめた目でカムポスをみたとき……思わず折竹がアツと叫ぶようなことが起つた。カムポスが札を置くとスイと立ちあがつて、諸君と、室中を睨めまわすように言つたのである。

「僕は、諸君に折り入つての相談がある。見られるとおり、武運拙つたなくカラツ尻の態となつたが、まだ僕は屈しようとはせぬ。それは、僕に抵当があつたからだ。でまず、その品を諸君にお目にかけるとして、どうか、気に入つた方は一勝負ねがいたい」

といつて、ポケットから掴つかみだしたものをザラザラツと音をた

てて、カムポスが卓上に置いたのである。とたん、室中のものがハツと息をのみ、思わず土まみれのままの燦爛たる光に……ダイヤ、しかも原石！ と唾然たる態。

「オイオイ、見てばかりいないで、なんとか言ってくれ」と無言の一座に業が煮えてきたか、カムポスの声がだんだん荒くなってくる。「いいか、俺はこの五粒のダイヤを、売ろうてんじやない。

俺が一か、八かの抵当にしようというのは……ダイヤよりも土のほうなんだ。ねえ、この溪谷性金剛石土がサラサラツと泣いて、

十億、一兆億のこんないい音が、欲張りどもに聴こえない

かって言ってるぜ」と土を掬ったりこぼしたりしながら、最後にカムポスが条件を言った。



「ところで、俺はこの世界にまだ一度も現われていないダイヤの新礦地の所在を賭ける。それにはまず、諸君の誰かに値を付けてもらう。そして、それだけの金額のご提供をねがう。いないか

俺を負かして所在を吐かせるやつは

即座に、<sup>そくざ</sup>室の隅のほうで五万ミルという声がしたが、カムポスはふり向きもしない。それから、五万五千、六万と小刻みにいつて七万ミルまでくると、そこで声がハタとなくなってしまった。

第一、風のごとくに現われたこの不思議な人物が、いかにダイヤをみせ<sup>カ</sup>溪谷<sup>ス</sup>性<sup>カ</sup>金剛石<sup>リ</sup>土<sup>ヨ</sup>を示すとはいえ、誰が十二分の信賴をこの男にかけようか。まったく、こうした場所に入りをする富有的階級の間人が、怪しさ半分欲半分で、まずこの程度ならばファイに

してもというのが、七万ぐらいのその辺だったのであろう。カム  
ポスは、もつとこの話を現実付けねばならぬと思つて、

「じゃ、その礦地とはいつたい何処どこにあるか。また、どうして俺  
がそれを見つけたかということ、これから諸君にかい摘んで話  
そう。しかしだ、今度は七万ミルなんてえ、吝しみつたれは止めて貰  
うよ。もし、そんな声が出たらそれつきりにして、俺はサツサと  
帰るからね」

それからカムポスは、賭博場キヤヅノはいうに及ばず踊り場からキヤバ  
レーまでのほとんど「ポムピニヨス・エナモール恋 鳩」の全客をあつめたと思

われるほどの、黒山の人を相手に滔とうとう々と言いはじめたのである。  
その第一声が、まず人々に動揺をおこさせた。

「ところで、その新礦地があるのは、  
グラン・チャコ Gran Chaco だ。どうだ、  
 グラン・チャコとは初耳だろう」

南米に、まだ開拓のおよばぬ個所が四つほどある。一つは、人も知る奥アマゾン、さらにオリノコ川の上流もその一つだろうし、また、南端へゆけばパタゴニア地方にも、恐竜の全化石などがでる未踏地がある。そうして、第四がこのグラン・チャコなのだ。

南緯二十度から二十七度辺にまでかけ、アルゼンチン、パラグアイ、ボリヴィアの三か国にわたり、密林あり、沼しやうたく沢あり、平原ありという、いわゆる庭園魔境の名のグラン・チャコ。そこは奇獣珍虫が群をなして棲すみ、まだ、学者はおろか、マタコ Mattaco

《マツタコ》インディアン 印度人でさえも、奥地へは往ったことがないと

いうほどの場所だ。

「で、そのグラン・チャコのなかに『Pilcomayo』《ピルコマヨ》  
という川がある」とカムポスが淀みなくよど続けてゆく。

「それは、フォルモサの密林の北をながれて、ながらくパラグアイ、アルゼンチン両国の境界争いの場所だったことは、諸君も知  
つておることだろう。たがいに、川の南北に陣どつてフォルチネス堡壘を

きずき、いまなお一触即発の形勢にある。では、その境界争いは  
なんのために起つたか。貪ろうとしたのか？ それとも、条文の  
不備か？ 何のためかというに、それは、このピルコマヨという  
化物のような、じつに不可解せんぼん千萬な川のために起つている。

で諸君、諸君はこの川が貫いているエステロス・デ・パチーヨ『Esteros de Patino』すなわ

ち『パチニヨの荒湿地』なるおそろしい場所を知っているかね。いや、ブラジルには通り名がある。パチニヨというよりも『トッコ蕨ダ・フェートの切り株』——。俺はその名を知らんとはいわさんぞ」

パチニヨの荒湿地、一名「トッコ・ダ・フェート蕨の切り株」——それには、また人々の中がザツとぎわめき立ったほどだ。読者諸君も、わらび蕨の切り株とはなんて変な名だろうと、ここで大いに不審がるにちがいない。蕨といえ、太さおやゆび拇指ほどもあるれば非常な大物である。それなのに、それが樹木化して切り株となる魔所といえ、それだけ聴いても、この「トッコ・ダ・フェート蕨の切り株」なる地がいかなるところか分るだろう。でまず、順序としてピルコマヨ川の、化物然たる不思議な性質から触れてゆこう。

ピルコマヨには、元来正確な流路がない。土質が、やわらかな沖積層で岩石がなく、そのうえ、蛇行が甚しいために水勢もなく、絶えず溢れ絶えず移動し、いつも決まりきった川筋というものがない。まったく、きょうの川は明日はなく、明日の湿地は明後日の川と、転々変化浮気女のごとく、絶えず臥がし床ようをかえゆくのがピルコマヨである。そうしてその流域のなかでもいちばん怖い場所が、「蕨トッコ・ダ・フエイトの切り株」のパチニヨの湿地になっている。

これまでこの川は、水中植物の繁茂が実におびただしいために、オイル權オイルが利かず、さかのほ遡さかのほつたものがない。従つて、国際法でいう先せんせん占せんの事実というやつが、パラグアイ、アルゼンチンのどっちにもない訳である。日本人が、フランス人よりも先に新南群島を占めたた

め、いまは日本の領有となっている。その先占を、一九三二年の夏の終りごろに、いよいよアルゼンチン政府が決行することになった。

ピルコマヨが、「トッコ・ダ・フェート蕨の切り株」の荒湿地でまったく消えて

しまう。それから、そこを出ると三つの川になり、「リオ・ミステリ暗秘

ーソ河、「リオ・コンリーソ迷錯」河と成程というような名の川二つ。そし

てその南にピルコマヨの本流がのたくり出ている。つまり、ラPa

モス・ジメネスmos Gimenez 教授を主班とするその探検隊の目的は、以上三つの

流系をしらべ、あわよくば、グラン・チャコの謎といわれる「ト蕨

ツコ・ダ・フェートの切り株」を衝つこうとするものであった。

ところが、その探検がなんじゆう難澁ををきわめ、やっと一年後に「蕨

の切り株」の南隅に立つことができた。そのとき、じつに世界の耳目じもくをふるい戦かせたほどの、怪異な出来事が起つたのだ。

そこは一面、サベジニヨス細茅サベジニヨス、といつても腕ほどもあるのが疎生そせいして

いて、ところどころにフエート・ジガンデ大蕨フエート・ジガンデがぬつと拳をあげている。そ

して、下は腐敗と醜はつこう酵はつこうのどろどろの沼土。すると、ジメネス教

授が立っているところから百メートルばかり向うに、髪をながく垂らした女のようなものが、水の中からぬつくと立ちあがったのである。教授は驚いた。——よく見ればいかにも女だ。しかし、すぐ浴ゆあみをするように跣かかんだかと思うと、その姿が水中に消えてしまったのだ。

女だ。あくまで人間であつて外の生き物ではない。しかし泥中



で生き水底で呼吸いきのできる、人間というのがあるべき訳はない。

と、半ば信じ半ば疑いながら、まったくその一日は夢のように送  
つてしまったのだ。すると翌日、顔をまっ蒼さおにした二人の隊員が、  
教授の天幕テントへバタバタと駆けこんできた。

聴くと、「蕨トッコ・ダ・フェートの切り株」へいつて蝦類えびを採集していると、

ふいに泥のなかへ男の顔が現われた。それは、まるで日本の能面  
にあるような顔で……びっくり仰天した私たちの様をみるや、た  
ちまち泥をみだして水底に没してしまつたというのだ。これでい  
よいよ、水棲人の存在が確認された。教授はそれに、沼底棲インコラ・パル  
息人ストリスと学名さえつけたのだが、あまりに、想像を絶するような

途方もないことなので、かえって世界の学会から笑殺されてしま

ったのである。

こうして「蕨の切り株」はちらつと戸端とばぐち口をのぞかせたまま、

むしろ妖相を増し再び謎となったのである。ところがここに、世

にも可怪おかしな話といえれば必ず選ばれるような、  
インコラ・パルストリス  
 水 棲 人

を三度目に見たものが現われた。それが、余人ではないカムポス。

「俺は去年、パラグアイ軍の志願中尉をやっていた。まったくあの国は、学歴さえあれば造作なく士官になれる。で俺は、一通り

号令をおぼえたころ、任地に送られた。これが、『蕨の切り株』

に大分近くなっている、ピルコマヨ堡フォルチネス墨線中の『La Madrid』  
ラ・マドリッド

というところだ。俺は、そこへゆくとすぐ上官に献策をした。先せ

んせん  
 占をしなさい、全隊が銃を捨てて探検隊となり、『蕨の切り株』

に踏みいって、パラグアイ旗を立てれば——と言ったら、俺はひどく怒られた。理屈はどうでも、銃を捨てて——なんて言葉は非常に悪いらしいのだ。俺は、そんな訳で業腹ごうはらあげくに、よし、じゃ俺が一人で行って先占をしてやると、実にいま考えると慄ぞつとするような話だが、腹立ちまぎれにポンと飛び出したのだ。ところで、至誠神かみに通ずなんて言葉は、ありや嘘だ。俺は、無法神に通ずといたいね。ジメネスが、一年も費かかつてやつとゆけた道を、俺は、ズブズブ沼土を踏みながら十日で往つてしまつたよ。つまり、泥沼があれば偶然に避けている、危険個所と危険個所のあいだを千番のかね合いで縫つてゆく——僥倖ぎょうこうの線を俺は往けたわけなんだ。

で、『蕨の切り株』をはじめて見た日に、じつに意外なものに俺は出会つちまつたんだよ。ちようど、俺がいるところから四、五十メートルほど先に、ザブツと水をかぶつたまま立ちあがつたものがある。人だ。さてはジメネスのいうのは嘘ではない。人類の、両棲類ともいいう沼底棲息人——。秘境『蕨の切り株』とともに数百万年も没していた怪。

それは、藻か檻褸ぼろかわからぬようなものを身につけていて、見れば擬れまぎもなく人間の男だ。胸に大きな拳形の痣あざがあつて、ほかは、吾々と寸分の違いもない。と、いきなりそいつが片手をあげて、俺をめがけて投げつけたものがある。と思つたとき、もうそいつの姿が水面にはなかつたのだ。俺は水棲人のやつがなにを抛

つたのだらうと、フエート・ジガンデ大 蕨 を折つてやつとこさで掻きよせた。手にとると、なんか葉っぱの化石みたいなもん。それが、二つに合わさつて藻で結えたなかから、現われたのがこのダイヤモンドだ」

そこまで言うのと、カムポスは睨め廻すような目で、あたりをぐるつと一渡りみた。

「さあ、そこまで言いや、納得がついたらう。その水棲人が、広茫千キロ平方もある『蕨の切り株』の、一体どこから現われたかというにや、俺に目印がある。どうだ、諸君はそれをいくらに踏む

—

声がない。ようやく、カムポスの額に青筋が張ってきたころ、

一隅から美しい声がかかった。

「五十万ミル。あたくし、その程度ならお相手しても宜よろしゅうございます」

そう言つて、まっ白な胸をチラ付かせながら、喧騒の極に達した人波を、かきわけてくる。カムポスは、息を引いたまま白痴のような顔で、現われたその人をぼんやりとながめている。ああ、さつき彼が白百合のようにみた女性。

## 亡霊か、水棲人か

「承知しました」と、目をその女性の顔へ焼きつけるように据すえ

たまま、ちよつと上体をかがめてカムポスが挨拶あいさつした。

「では、勝負の方法はなんに致しましょう。ですがこれは、三本勝負となるようなことは、あくまで避けねばなりません。一本勝負——それにご異存はないと思えますが」

「でも、こういう場所でやりますカードの遊び方を、私は、あまり知っていないのです」

その女性も、声が心持ちふるえ、上気した頬はまた別種の美しさ。言葉にも物腰にも深窓しんそう育ちが窺うかがわれ、いまでも躊躇ためらったような初心うぶ初心うぶしい言いかたをする。まったくこんな、ナイトクラブあたりにはけっして見られぬような女性が、どうして途方もない大勝負をカムポスに挑むのだろう。また、一方カムポスもどうし

てしまったのか、急に、それを境いに澆刺さが消えてしまった。

目も、熱を帯びたようにどろんとなり、快活、豪放、皮肉の超ちよう

凡ぼんたるところが、どうした！ カムポスト、喰らわしたくなる

ほど薄れている。

「では、〃エスカーダ・デ・モン [Escada de mao] 〃 はいかがぞ」

「エスカーダ・デ・モン 梯子キヤジノ 子」とは、いわゆる相対さしの遊び方である。しかし

それは、賭博場キヤジノなどでやるものではなく、もちろんその婦人など

も知っているものであった。とたんに、どこからともなく笑いが

始まって、娘っ子がやるようなことで五十万ミルが争われるなん

て、こりや千年に一度もないようなことだ。と、がやがやそんな

声が聴えてくるなかで、その女性が小切手を書いた。ナシヨナル



・シテイ銀行リオ・デ・ジャネイロ支店。してみると、この婦人は米人であろう。そして署名が、ロイス・ウエンライト。

と、その時——その署名をちらつと見たカムポスが、まるで一時にあらゆる思念が飛びさったような顔で、ぽかんと放心の態になったのだ。なんの衝撃シヨックか　しばらく窓際まどぎわに出て風を浴びせていたほど、カムポスには異常なものだつたに違いない。

「カムポスめ、どうしやがつたんだらう。こんなようじや、奴め負けるかもしれないぞ」と、カムポスの様子が急に変わったのに気がつく、なんだか勝負の結果が危ぶまれるような気に、折竹もだんだんになってきた。やがて、満座の注視を一点にあつめて、五十万ミルの「梯子」エスカーダがはじまつた。

作者として、勝負の成行きを詳述するのは避けるが、ついに、カムポスの勝利動かぬという局面になった。手札が二枚、ハートの一に、ダイヤの十。これは誰しも、ダイヤの十で切つてハートの一を残す。人々は、緊張が去つてざわめきはじめ、やれやれ、気きまぐ紛れにもせよ五十万ミルは高たか価いと、ようやく、方々で扇の音が高まつてきた。

「なるほど、こいつの一番違ちがいの、易うらないは当つた。五十万ミルがそもそも始めで、これから奴は鰻うなぎのぼりになるか　代議士になり、將軍になり、大統領になり——。まだまだラテン・アメリカにはそんな余地があるからな」

とカムポスの背後にいてこんなことを考えていた瞬後、アツと、

折竹が思わず叫ぶようなことが、カムポスの指に起ってしまった。いわゆる手拍子が好勢にゆるんだのか、子供でさえ最後にとつて置くハートの一を、彼がパツと場へ投げだしてしまったのである。逆転！ あれよあれよと満座が騒ぐなかで、勝負は一瞬に決してしまった。

カムポスが負け、ロイスが勝った。

「どうも、変だ変だと思つてたんだが、惚れやがって」

と折竹は呆れかえるような思い。いまの、カムポスの失策が明らかに故意であることは、別に、本人に問いただすまでもない。一目惚れというかなんて早いやつだと、暫く二人を見くらべながら呻うなっていたのだ。しかし、その翌日すべてが明らかになった。

約束どおり、翌日ロイスがカムポスを訪ねてきた。彼女が、五十万ミルの大勝負を引きうけたというのも、事情を聴いてみればなるほど  
成程とうなずける。きようは、瀟洒しょうしゃな外出着であるせいか、白いロイスがいつそう純なものにみえる。

「折竹さん、あなたは三上重四郎というお国の医学者を、ご存知ぞんじでいらつしやいますね？ パタゴニア人にリザーヴエーション保護区政策をとれと、アルゼンチン政府と喧嘩をした……」

「知ってますとも。去年パタゴニアで行方不明になった……」

「いいえ、それがパタゴニアではなかったのです。それからあのう、三上が学生時代に発表した『Petrin 堆積ペトリン・セオリー説』も、折竹さんはご存知でございましょう」

三上重四郎は、いわゆる二世中の銚々そうそうたるもの。在学中、はやくも化石素堆積ペトリン説なるものを発表した。

化石素とは元來植物にあるもので、一つの種類が、絶滅に近づくと組織中にあらわれてくる。たとえば、松は枯れればそのまま腐敗するが、杉は、神代杉という埋れ木になることが出来る。いわば、これは化石になる成分で、それが現われたものは絶滅に近いというのだ。で三上は、人間の血のなかにもそういったものがある。なかには現にもう現われている種族があるといつて……、アルゼンチン人の大部分である雑種児の血と、いま同国の南部、パタゴニア地方で、絶滅に瀕ひんしつつあるパタゴニア人の血とを比べたのだ。

すると、アルゼンチン人にはある化石素ペトリンが、パタゴニア人にはない。つまり、まさに滅びようとするパタゴニア人のほうが、かえって種族的には若いということになったのだ。そこで三上は、それをアルゼンチン政府攻撃に利用して、パタゴニア人の減少は自然的原因ではなく、冷酷なアルゼンチン政府が保護区をつくらずに、むしろ滅んでしまうのを願わしく思っているのだろう。俺は、世界の輿論よろんに訴えてもパタゴニア人を救うと、三上は単身パタゴニアに赴いたのだ。おもむ

そこは、氷雪の沙漠、不毛の原野、陰惨な空をかける狂暴な西風、土人は、食に乏しく結核となって斃たおれてゆく。これでは、百の薬を投じようと到底救い得ぬ、結局保護区をもうけ氷の沙漠さばくか

ら移さねば……と。

三上の日本人の熱血と人道愛とが、ここに合衆国全土に呼びかける大運動になろうとした。その矢先、彼の姿がふいに、消えてしまったのだ。それ以来、一年にもなるが依然三上の行方は、杳<sup>よう</sup>として謎のように分らない、という、ロイスの話を一通り聴きおわると、折竹がやさしく上目使いをして、

「お嬢さんは、では三上君をお愛しになつて……」

「はあ、二人ともおなじ大学でしたし……」

とロイスも燃えるような目になってくる。

「そんな訳で、三上はアルゼンチン政府にたいへん憎まれておりました。それで、たぶんアルゼンチンのどこかに秘密囚となつて

いるのだろう——と、私はそう考えて南米へまいりまして、これでも、手を尽してどんなに探しましたでしょう」

額を支えた手で、卓子がかすかに揺れている。愛するものの不幸を訴えるように、ロイスはなおも続けた。

「でも、結局は断念あきらめねばなりませんでした。随分、金を惜しまずあらゆる手段を尽しましたが、三上の行方はどうしても分らないのです。私は、半分自棄やけでリオへ来て、話に聴いたナイトクラブとはどんなところだろうと、なんだか覗のぞくような気持で『恋鳩』へゆきました」

「では、どうして、カムポスと一勝負という気になりましたね。  
貴女あなたに、五十万ミルぐらいの金は何でもないでしょうが」



「それは」とロイスの顔がきゆうに火照つてきて、ほて「カムポスさんが、ご覧になった水棲人の話。あれを聴いて、私がなんでそのままに出来るでしょう。水棲人の胸にあつた拳こぶしがた形の痣あざと、ちようど同じものが三上にもあるのです」とこみあげてくる激情の嵐に、ロイスはもう、吹きくだかれたよう。

「ですから、カムポスさんは三上をみたんでしよう。あの水棲人とは、三上ですわ」

とたんに、室内がしいんとなった。三上が、魔境「蕨の切り株」にいて、水棲人とは 沼土の底にいて、なおかつ生きられるとすれば、三上という男はさいしよからの化物だ。すると、そこへカムポスがううんと嘆声を発して、

「では、ロイスさん、こっちの話をしますからね。私が、なぜあなたに対して勝とうとはしなかったか、勝てば、勝てたのをなぜ負けたかというと……、ロイス・ウエンライトという夢にも出る名の婦人が、貴女だと始めて知ったからです。」

水棲人が、私に投げてよこした葉っぱの化石みたいなものには、じつをいうと一面の文字が書かれてあつた。しかし、それを私が搔き寄せたために、その文字がほとんど擦れてしまった。ただ、残ったのがあなたの名の、ロイス・ウエンライトというだけ……」

「ああ、そんなことを聴くと、泣きたくなりますわ。三上は、きつとダイヤを報酬にするからこれを私に届けてくれと、あなたにお願いしたのでは……？」

奇縁とは、じつにこうした事をいうのだろう。三上が、生きてか、それとも死んでの亡霊かはしらぬが、とにかく、愛するロイスへ通信を頼んだ。それが、この話のなかのたった一つの現実。他は、すべて怪けつたい体にも分らなすぎることばかりだが、ロイスの身になってみれば……。

事実、ロイスの熱情はこれなりではすまなかつた。よしんば空しかろうとも「蕨の切り株」へ往つてと、熱心に一日中折竹を説いて、ついにグラン・チャコ行きを承知させてしまったのである。そうして、カムポスを加えた三人の者が、「蕨トッコ・ダ・フェイトの切り株」へとりオ・デ・ジャネイロを発たつていった。

## 永世変りゆく大迷路

ジメネス教授が、「蕨の切り株」をとり巻く湿地を調査して、まるで海図みたいに足掛りの個所かしよを記入した地図がある。それが、米国地理学協会にあつたのが大変な助けとなつて、ともかく難行ながら「蕨トッコ・ダ・フェートの切り株」にでたのである。それまでは、プオルモサの密林ではアメリカ豹ジャガールの難、草原パンパスへでればチャコ狼アガラガスの大群、グアラニーインディアン印度人百名の人夫とともに、一行はいい加減へとへとになつていた。しかし、はじめて見る「蕨の切り株」の景観は……。

ただ 渺びようぼう 茫ぼう 涯はて してもない、一枚の泥地。藻や水草を覆うている

一寸ほどの水。陰惨な死の色をしたこの沼地のうえには、まばらな細茅サベジニヨスのなかから大蕨フエート・ジガンデが、ぬつくと奇妙な拳こぶしをあげくらい空を撫でている。生物は、わずか数種の爬虫類はちゆうがいるだけで、まったく、水掻きをつけ藻をかぶって現われる、水インコラ・パ

棲人ルストリスの棲所すみかというに適わしいのである。すると、ここへ来て五日目の夜。

陰気な、沼蛙ぬまがえるの音がするだけの寂漠たる天地。天幕テントのそばの焚火たきびをはさんで、カムポスと折竹が火酒カンニヤをあおっている。生の細茅サベジニヨスにやつと火が廻ったころ、折竹がいいだした。

「君は、ロイスさんにどんな気持でいるんだね」

「……………」

「そういう気配は、君がはじめてロイスさんをみた、その時から分つていたよ。惚れもしなけりや五十万ミルを棒に振つてまで、君がわざと負ける道理はないだろう」

「俺はまた、大将という人はサムライだろうと思つてたがね」とカムポスがじつに意外というような顔。

「俺は、すべてをロイスさんにうち明けにやならん義務を背負つている。義務であるものに金を取り込むなんて、俺にやどうしても出来ん。カムポスはつねに草<sup>パンパス</sup>原の風のごとあれ、心に重荷なければ放浪も楽し——と、俺は常日ごろじぶんがいい聴かしてるんだ」

「詫<sup>あや</sup>まる」と折竹はサツパリと言って、

「だが、惚れたなら惚れたで、別のことじゃないか。君が、生涯に一人だけ逢うというその女性が、ロイスさんのように、俺にや思えるよ」

「くだいね、大將は」カムポスも、へきえき辟易してしまつて、

「いかにも俺は、あの人が好きだよ。好きで好きで、たまらんと  
いうような人だ。これだけ言つたら、大將も気が済んだろう」と、  
なにかをまぎ紛らすように笑うのである。

しかし、事実水棲人とはまったくいるものか？ また、カムポ  
スが逢つた三上の姿は亡霊か、それとも生態が變つて、沼土の底  
でも生きられるようになったのかと、いつも四六時中往来する疑  
問は、その二つよりほかになかった。カムポスが、「ロイスさん

の執念にもまったく恐れ入ったよ。よくまあ、五日間ぶっ続けに水面ばかり見ていられるもんだ」

「そりや、君がみた三上は幽霊じゃないだろう」

と、はじめて折竹がその問題に触れたのだ。

「といてだよ、たとえば、水棲人といえるものになって沼の底へはいったにしろ、もう三上は到<sup>とうてい</sup>底生きちやまい」

「ええ、何のこった」とカムポスは煙にまかれたように、

「君はよく、水棲人というと笑ったじゃないか。人間の三上がどうして沼の底へ入りそして生きられるか——君に、それが分ったのかね」

「分ったかしらん。あれは、君はともかくジメネスも見ている。



僕は、水棲人が実在するものとして、考えている」

その奇怪きわまる折竹の言葉が、それから十日ばかり後に実現することになった。それまでも、あるいは地震計を据<sup>す</sup>えて微動のようなものを計ったり、土人に、オムブのような浮く樹を運ばせでは、いくつも沼地に投げ足掛りをつくっていた。目標は、カムポスが三上に会った地点——五本の<sup>おおわらび</sup>大蕨。なお、それに加えて千フィートあまりの、<sup>ふじづる</sup>藤蔓が三人分用意されている。

「これから、僕ら三人は沼の底へ、もぐってゆく」

と、指令をいうような沈痛な語気の折竹に、ロイスもカムポスも<sup>あぜん</sup>啞然となつてしまった。泥<sup>すっぱん</sup>亀でさえ、精々十尺とはもぐれまい。それなのに、何百尺ゆけば底がみえるかもしれぬ泥のなかへ、

潜水器も付けず潜ってゆけとは　しかし、折竹といえど名だたるエキスパート。あるいはと、折竹の命にしたがった二人が危なげに浮き木をわたり、最終点の「五本の大蕨」へきた。そこで、最後の言葉を折竹がいった。

「沼の底へゆくということは依然として変わらない。二人は、いつさいなにも考えず、私のとおりにする。私が、飛びこんだ個所へ、躊躇ちゆうちゆうせずに飛びこむ。いいか」

そういつて、折竹は大きく息を吸った。日没の、血紅の雲をうつして真っ赤に染った沼土は、さながら腐爛物ふらんのごとく毒々しく美しい。と、彼のからだスイト浮き木を離れ、ずぶりと泥にはまったかと思うと、たちまち見えなくなった。二人は、相次いで

飛びこんだ。すると、泥のために息詰まるような苦しさが、ほとんど一、二瞬間後には消え、はっと空気を感じた。おやつと、息を吸えば肺に充つる嬉しき。

「折竹さん、ここ、何でしょう？ どこに、いらつしやいますの？」ロイスが、あまりといえはあまりなこの不思議に、漆黒の暗のなかで折竹に声をかけた。腐土のにおいと湿った空気。ぬるつと、触れた手には水苔みずこけがついてくる。と、遠くないところから折竹が答える声。

「ここはね、いわば地下の大密林というのでしよう。むかしは樹がしげった溪谷だったでしょうが、地じすべ入りもあつてすつかり埋れうもた。そこへ、ピルコマヨが流路を求めてきた。水が、沖積層ちゆうせきそう

のやわらかな土に滲しみみながら、だんだん地下の埋れ木のあいだへ道をあけていったのです。どこまで行くか、どこで終るのか、形も蟻穴のように多岐怪曲をきわめた——『蕨の切り株』の地下のラビリンス大迷路です。それも、上から水がくるために、絶えず形が變つてゆく。また、沼の水面下に大穴が空いても、すぐピルコマヨが運んでくる藻のために埋まってしまふのです」

「では、三上はここへ落ちたのでしようね。カムポスさんに会ったときは、ここから出たのでしようね」

「そうですよ。しかし、生きていられることは、期待せんほうがいいでしょうね」

と言ってから、カムポスに声をかけた。

「君は、僕が地震計を持ちだしたら、笑ったじゃないか。だが、絶えず迷路が變つてゆくので、微動も起る。それに、あのダイヤの土が溪谷性金剛石土カスカリヨなのを考えても、むかしは溪谷——といったような深い地下が思われてくる」

そこで、懐中電燈がはじめて点された。ぐるりは、水苔みずごけのついた軟かな土、ところどころに、埋れ木の幹が柱のようにみえている。三人は、それから足もとに氣遣いながらじわりじわりと進んでいった。すると、紆余曲折うよきよくせつしばらく往いつたところに右手の埋れ木にきざんだ文字と地図。あつと、ロイスが胸をおどらせてみれば……。

——日本人、三上重四郎なるものこの迷路に入る。アルゼンチン各所監獄を転々とした末に、政治犯四名とともに「蕨の切り株」へ連れてこられて機関銃弾で追われながら沼地へと追いやられた。四名のなかには、革命に関係した有名な女優 エミリア・ヴィダリ Emilia Vidali 嬢も混っていた。嬢も、おそらくここへ落ちこんだのだらう。時々、かすかに歌声のようなものを聴いたが、ついにめぐり会えなかつた。それほど、この迷路は複雑多岐である。さらに、ここへ来て余は、勝利を痛感す。それは、この密林が埋れて迷路ができたのは……まだ新しく、白人侵入当初だったらう。その犠牲者が、所々に完全な屍蟻しろうとなっている。それに反して、グアラニー土人の一つも見当らない。つまり、白人における化石ペトリ素説が、ここに

完全に立証されたわけだ。

ここは、四季を通じて一定の温度を保ち、寒からず暑からず至極ごく凌しのぎよい。食物は、盲めしいた蝦えび、藻草の類。底には、ダイヤモンドがあるが無用の大長物。さて、本日出口をさぐりさぐりやつと地上へ出たが、やはりパ、ア両軍の対峙たいじは続いている。ダイヤをやつて、ロイスへの伝達を頼んだが、あの男はやつてくるだろうか。

ああ三上と、しばらくロイスは咽むせび泣いていた。おそらくこれが彼の絶筆であろうか。なお、地図には祈トラスコロ祷台とか、鉄プエルタ・デの門・イエロとか目印が記されてあるが、おそらく、当時と今とは道が

ちがっているだろう。しかしこれで、水棲人の謎が解けたのだ。

ジメネス教授がみた女の姿は、たぶんエミリア・ヴィダリ嬢だろうし、また沼地から現われた化石屍蠟しろうをみて、水棲人のぞ覗くと早合点したのだろう。そこからは、道あるいは広くあるいは狭まり、くねくね曲りくねりながら、下降してゆくようである。すると、眼界がとつぜん開け、かすかに光ひかり 苔ごけのかがやく、窪みのようなところへ出た。

あたり四辺は、かつて地上の大森林だった亭々たる幹の列。あるいは、岩石ともみえる瘤りゅう 木うぼくのようなものの突出。ちよつと、この奇観ぼうぜんに呆然たる所へ、ロイスのけたたましい叫び声……。

「アツ、あすこに誰かいますわ」



すると、はるか向うの光苔の微光のなかに、一人の、葉か衣か分らぬボロボロのものを身につけた、瘠せこけた男が横たわっている。声を聴いたか……手をあげたが、衰弱のため動けない。三上と、ロイスはぼろりと双眼鏡を取り落した。

しかし、ここに何とも意地の悪いことには、ちようど此処ここまでが綱の限度であった。ずぶずぶもぐる泥の窪みをゆくことは、僥ぎ倖ようこうを期待せぬかぎり、到底できることではない。みすみす眼前にみてとロイスの切なさ。そこへ、カムポスが敢然と言ったのである。

「俺がいつてみる。このままで、帰れるもんじやないよ」

そうして彼は、感謝の涙にあふれたロイスの目に送られながら、

綱をといて窪みに降りていったのだ。無法、神に通ず——とは、カムポスの憲<sup>モットー</sup>法。今度も、三上を抱えてようやく戻ってきたのだが……、差しあげて、折竹に渡したとき足場を取りちがえ、ずぶつと深みへ落ちこんでしまった。とたんに、その震動で亀裂がおこり、泥水が流れ入ってくる。

「あツ、カムポス」と、思ったときは胸までも漬<sup>つか</sup>っている。カムポスは、一度は血の気のひいたまっ蒼な顔になったが、やがて、観念したらしくにこつと折竹に笑<sup>え</sup>み、

「駄目だ。俺は、もう駄目だから、君らは帰ってくれ。ホラ、みる、上の土がだんだん崩れてくるじゃないか」

「カムポスさん、私のことから、なんてすまないことに」

とだんだん浸ってゆくカムポスに絶望を覚えるほど、いつそうロイスは切なく、絶え入るように泣きはじめた。

「じゃ、カムポス」と、折竹がおろおろ声で言うのと、彼は、

「一番違い——動物富籤ビツシヨのあれがやはりこれだったよ」

それからロイスに向い、「御機嫌ホーアよう、気を付けてね」と言った。

それから、身を切られる思いで帰路についていた二人の耳へ、カムポスが高らかにいう声が聴えてきた。「シラノ・ド・ベルジユラツク」の一節を朗誦ろうしやうしている。シラノが、末期にうち明けなかつた恋を告白しているところ……。

「面白くもない私の生涯に、過ぎゆく女性の衣摺きぬずれの音を聴いた

のも、まったくあなたのお蔭」

ああと、ロイスが何事かをさとり、抱いていた三上の感触がスウツと飛び去ったような気がした。カムポスが私に恋し、私のために死んでくれた……。朗誦の声は、なおも続く。

「哲学者たり、理学者たり、詩人、剣客、音楽家、また、天界の旅行者たり。恋愛の殉教者——カムポス・モンテシノスここに眠る」

そして、声が杜絶とだえた。





# 青空文庫情報

底本：「人外魔境」角川文庫、角川書店

1978（昭和53）年6月10日発行

※底本は副題に、「水棲人『インコラ・パルストリス』」とルビを振っています。

入力：笠原正純

校正：大西敦子

2000年9月15日公開

2014年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 人外魔境

水棲人

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫  
著者 小栗虫太郎  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>